



プレーワーカーの須永 力さん(正面に顔を向けている男性)に教えられ、笹笛作りをする子どもたち。
[保養ツアー]には、スタッフ以外に子ども14人と保護者15人が参加した。

福島県では、県内外の放射線量の低い場所で子どもたちを自由に遊ばせる、「福島の子ども保養プロジェクト」(通称・コヨット!)が行なわれています。「コヨット!」の企画として8月27日～28日、猪苗代町の森の中で実施された「こども遊び塾」の様子を紹介します。

学校での外遊びの制限は
なくなつたが
放射線を意識する人はなお多い

「あ、音が出た!」

子どもたちの歓声が響くブナの森には、前日降った雨を含んだ葉をひすい色に輝かせる、木漏れ日が差し込んでいました。森の中に響く音の正体は、子どもたちの遊び場づくりの専門家・プレーワーカーの須永 力さんに教えてもらい、子どもたち自身が初めて作った笹笛。

一般社団法人プレーワーカーズ代表の須永さんは8月最後の週末となったこの日、「中の沢温泉」「リゾート・インぼなり」に泊まる森遊びとピザづくりを体験する保養ツアーに参加しました。この「保養ツアー」は福島県生協連と福島大学地域環境論研究室、福島県ユニセフ協会が主催して行なう「福島の子ども保養プロジェクト」(通称・コヨット!)の一環で実施されたもので、(一社)プレーワーカーズは「コヨット!」と連携しています。
東京電力福島第一原子力発電所事故に見舞われた福島県は、2011年6月時点で、県内の公立小中高校と特別支援学校827校のうち465校が、子どもたちの

子どもに“外遊び”の機会を提供するため 森の中で開かれた「こども遊び塾」

福島県生協連



プログラム初日は屋内で工作に取り組んだ。
自分たちで作った竹の水鉄砲で遊ぶ。



ピザ作りをする子どもたち。

スタッフとして参加した生島康太郎さん(左)と中森里江さん。



プレーワーカーの石黒美穂さん(左)と高田浩一さん。

「こども遊び塾」からは プラスアルファが 生まれている

15年6月には、福島の子どもた

放射能と向き合いながら子育てをし続けなければならない保護者の精神的なケアをも企画して行なわれている、一連の保養の取り組みです。「コヨット!」では今年3月までに、1,578の企画が実施され、延べ7万8,439人の保護者と子どもたちがこれに参加しました。

なつた「県民世論調査」では、普段の生活で放射線を意識していると回答した人は、なお44・7%に上っています。

屋外活動を制限していました。今年1月に報道されたNHKの調べによると、こうした制限は16年に入りすべてなくなりました。が、同年6月、地元紙の『福島民報』と福島テレビが共同で行

ちに「外遊び」の機会を提供する拠点として、福島県猪苗代町の沼尻県有林で「こども遊び塾」が「開校」しました。今年8月の「保養ツアー」も、この県有林を会場に「こども遊び塾」として実施されたものです。

初日の8月27日はあいにくの雨になつたので、代わりに屋内で木や竹、川の石などを用いた工作に取り組みむことになりました。

「家では『危ないから触っちゃ駄目よ!』というカッターナイフなどの道具も使いましたが、『ああ、こうなるから危ないんだ、これだったら大丈夫なんだ』ということが子どもたち自身に分かって良かったと思います」という保護者の感想も聞かれ、参加者は楽しめたようでした。

この「保養ツアー」には地元の短大生のボランティアを含む13人のスタッフが参加しましたが、スタッフの一人、高田浩一さんは「私たちはボランティアですが、『こども遊び塾』は何をするのか、子どもたちにはどのように接しなければいけないのかを勉強する研修を受けて、スタッフになったのです」と説明してくれました。

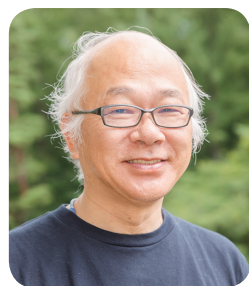
また、プレーワーカーの石黒美穂

さんは「『こども遊び塾』では、原発事故のことだけではない、プラスアルファが生まれていると思います。子どもには自分の世界を広げていく力がありますが、それを周りの大人がサポートする大切さを、保護者の方たちに少しずつ気付いていただけたようですね」と話しました。

思ったことが言えずに 苦悩する保護者を独りぼっち 置き去りにさせない

スタッフとして参加したコープみえ組合員の中森里江さんは「被災者の支援には一人ひとりが納得する形で関わっていききたいのに、これまでそれができなくて悶々としていました。『コヨット!』は、被災者の生の声^{こゝろ}が聞ける貴重な体験でした」と語りました。

中森さんに支援活動への参加を呼び掛けたコープみえ 四日市センターの生島康太郎さんは、同生協の被災地復興支援活動の延長線上で行なわれた、福島県のリンゴ、モモ、コメなどの産地見学に参加したそうです。「生産者は、放射能検査の結果が安全だから、ということを言いたいのではありません。『良質な農産物』を生産する福島県を



福島県生協連 専務理事 佐藤一夫さん

アピールしたいのです」。産地見学に参加したことがきっかけで福島の人たちの気持ちに心を寄り添わせ、「コヨット!」にスタッフとして関わるようになった生島さんは、「福島県はこんなに広いのに、子どもたちを外で自由に遊ばせられないところがあるなんて……」と、悔しそうな表情で口にしました。

「保養ツアー」2日目は、明るい好天に恵まれました。ピザが焼き上がるまでの時間、森の中を散策した参加者は、子どもたちはもちろん、保護者同士も打ち解けた雰囲気包まれました。「人によって放射能に対する考え方や受け止め方が異なる中で、思ったことが言えずに苦悩する保護者を独りぼっちにさせない、置き去りにしないことが重要なのです。これも『コヨット!』を行なう大切な目的になっています」と、この取り組みを主催する福島県生協連 専務理事の佐藤一夫さんは、力強く語りました。

(写真 四宮義博)